



事例：ユナイテッドリニューアブルエナジー(株)

# 地方創生と地域活性化をめざす「秋田産電力」 燃料チップは100km範囲から調達

## 100人の雇用を創出

ユナイテッドリニューアブルエナジーは昨年7月、秋田県初の木質バイオマス発電施設(秋田県秋田市)の稼働を始めた。発電量は東北最大級の20.5MWで、一般家庭約3万8000世帯に相当する。昨年7月の本格操業開始以降、今年5月の定期修繕まで、一度も停止することなく順調に稼働している。使用する燃料は県内から発生する未利用材を7割(年間11.5万t)、インドネシアやマレーシアから輸入したPKS(やし殻)を3割(年間5万t)使う。敷地面積は3.6haで、発電施設のほか、燃料の木質チップ乾燥機を導入している。発電した電気はすべてFITによって売電する。最大の特徴は「秋田産電力」をコンセプトに地域にこだわっていることだ。

燃料となる未利用材は県内7カ所の素材生産事業者や林業者と長期的なチップの供給契約を結んでいる。長期契約をすることで投資がしやすくなり、長期契約を結んだ事業者のほとんどがチップパーを整備した。この効果は派生的に広がっていく。山の木を切る林業者や森林組合は新たな雇用をし、山から下ろしてきた木や燃料のチップを運ぶ運送会社、チップ製造業者など、協力・提携する林業施設や運搬など合わせ、県内で約100人の新規雇用を創出した。発電施設では30人を雇用。人口減少や林業の低迷が続く秋田県にとって、新たな活力になると期待が高まっている。

## 県内全体から集める「秋田モデル」

一般的に燃料となる未利用材を集めてく



木質バイオマス発電所の外観

る範囲は50kmといわれている。しかし「弊社では100kmの範囲から集めています」とプラント運営保全グループ長の三好創氏は言う。創意工夫をすれば100kmの範囲から集めてきても採算は合う。またこの距離はちょうど秋田県内が収まる範囲でもあり、県内全域から燃料チップを集めてくる仕組みは「秋田モデル」とも言えるだろう。

発電に使う燃料チップをたくさん使うことは、これまで山に捨てていた間伐材を有効活用することになり、新たな間伐や主伐へとつながる。林業は活性化し、山は健全な状態になる。林業家にとってはこれまで捨てていた間伐材が新たな収入源になり、チップ製造業、運送業など新しい産業が生まれることで、経済効果にも徐々に表れている。現在は県産材の燃料は7割だが、今後はさらに割合を高めていくという。

また、秋田市の「次世代エネルギーパーク」と連携して見学者を受入れ、市内の福祉施設の協力で作成した記念品(木工品、クッキー)を配布するなど、地域に密着した事業も展開し、今年4月に東北経済産業局の2016年度「東北再生可能エネルギー利活用大賞」を受賞した。📌